

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月11日現在

機関番号：30106

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：平成21年度～平成23年度

課題番号：21652040

研究課題名（和文） 急速なグローバル化による地域方言の変容と話者心理に関する社会言語学的研究

研究課題名（英文） Rapid globalization of a rural community and its impact on local identity and dialect: Toward the integration of qualitative information into analyses of linguistic variation and change.

研究代表者 高野照司 (TAKANO SHOJI)

研究者番号：00285503

研究成果の概要(和文):グローバル化の最先端で劇的な社会変動が進行する地域社会において、住民のローカリズムやグローバル化へのイデオロギーが地域方言の変容にどのような影響を与えるのか、従来の計量的分析に質的洞察を組み込むことにより検証した。その結果、住民の方言使用(意識)は、反グローバル化とグローバル化を受容し地域の活性化を志向する二種類のローカリズムと正の相関を持つことが分かった。また、特に反グローバル化イデオロギーは、自然談話における方言的音声(分節音)の頻繁な使用により顕在化することも示した。

研究成果の概要(英文): This study aims to investigate the transformation of local identity and its impact on a regional dialect in a rural community where globalization has rapidly advanced. Integrating qualitative insights into the traditional quantitative framework, the study demonstrates that speakers' advanced, conscious uses of local dialects are closely linked to both negative and positive attitudes they have cultivated towards globalization of the community. Moreover, the speaker's specific attitudes (especially, negative ones) are also expressed through his unconscious uses of local phonetic variables in naturalistic interactions.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
21年度	1,400,000	0	1,400,000
22年度	700,000	0	700,000
23年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	210,000	3,110,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：社会言語学

キーワード：バリエーション、言語変化、グローバル化、地域方言、共通語化、アイデンティティ、土着意識、言語接触、計量的研究、質的研究、談話分析、イデオロギー

## 1. 研究開始当初の背景

急速にグローバル化する地域社会

北海道後志支庁ニセコ地区では、かつて小泉政権が奨励したインバウンド(外客誘致)促進政策を発端に、近年、外国人観光客の来訪が急増している。とりわけ2004年以降は、長期滞在型のリゾート地として特に豪州人の人気を集め、当該地区住民総人口(約5000

人)の少なくとも約10倍以上の英語(母語)話者を毎年迎え入れるという日本国内では極めて特異な地域社会を形成するに至っている。

ここ数年、円高の影響から豪州勢の来訪は減少傾向にあるが、それにとって代わりアジア諸国(香港・台湾・中国など)からの観光客の増加が目立ち、さらには外資系企業やア

ジア人富裕層による土地や不動産の売買も盛んに行われている。また、観光客来訪の傾向も従来の冬季集中型から夏季の避暑目的に移行し始め(ニセコ町 2006)、特に近年は、外国人の長期滞在者(または定住者)が急増している。

本調査は、北海道後志管内ニセコ町をフィールドに行われた。ニセコ町(総人口 4,703 人、2011 年 8 月末現在)は、北海道西部の後志支庁管内に属し、羊蹄山(通称「蝦夷富士」)の西麓に広がる農業を主体とした町で、数多くの天然温泉、大型リゾートホテルやペンションなどが点在する全国的にも有名な観光地でもある。夏はハイキング・テニス・ラフティングなどアウトドアスポーツの楽しめる避暑地、冬は世界随一のパウダースノーを誇るスキーリゾートとして近年は世界的にも知られるようになった。

実際のところ、ニセコ町人気は、日本国内でもバブル経済崩壊後(平成 6 年以降)もほとんど衰えることはなく、長期滞在や定住を目的とした国内外からの転入者が着実に増加してきている。2010 年国勢調査の結果を扱った新聞記事(北海道新聞 2011 年 2 月 15 日朝刊)によれば、2005 年以降 5 年間の人口推移において、長年過疎化に歯止めのかからない北海道内の市町村にあって、ニセコ町は道内第 3 位の増加率(3.4%, 158 人)を示している。

#### グローバル化とローカリズムの復興

こうした国内外からの新資本の参入や大規模開発、それに伴う人口の急激な流入は、ニセコ町民にとってどのような意味を持つのだろうか。実際のところ、ニセコ町の自然環境や社会生活の変化は、地域産業の活性化や公共施設の整備などといったプラスの因子だけではなく、生活環境の劇的変化(例えば、日本一の地価高騰率・自然破壊)に対する住民の違和感や防御的反応、異文化受け入れ体制の不備や遅れから生ずる住民とゲスト間での摩擦や軋轢など、多くのマイナス因子を含む可能性が指摘されている(北海道貿易情報センター 2006)。

ことばの観点から考えるならば、今日地球規模で進行する「グローバル化」は、日本語においては外来語(特に英語)の爆発的増殖や地域方言のさらなる共通語化など、地域文化の固有性や地域方言のバイタリティーを減退させる「均一化」現象と位置付けることができる。しかし同時に、グローバル化の進行は、共通語化とは相反する新方言の誕生(永瀬 1984, 井上 1985, 徳川・真田 1991, 真田 2000)や地域・民族方言の固持(Labov 1963, Meyerhoff & Niedzielski 2003)などの言語変容事例が示すように、話者の地元帰属意識やアイデンティティーの復興(ローカリズム)、それに依拠する地域方言のさらな

る多様化など、地域の固有性を話者が志向する逆転イデオロギーの芽生えにも繋がると言える(Johnstone 2004)。

## 2. 研究の目的

本研究では、アンケート調査によるニセコ町民の方言使用意識、および社会言語学的インタビューによる自然発話データを基に、上述した二律背反的なイデオロギー(グローバル化とローカリズムの復興)の混在に注目し、当該方言の共時的バリエーションと個々の住民(話者)が抱く土着意識やアイデンティティーとの規則的關係を検証する。

グローバル化の最先端で劇的な社会変動が進行する地域社会において、既存の方言はどのように変容するのか。従来の言語接触研究の計量的分析の枠組みに質的分析を導入し、グローバル化による生活変化に対する住民の意識や態度を検証に含めることで、言語変化研究の普遍的テーマである「変化の社会的動因」の究明も最終的な目標にすえる。

## 3. 研究の方法

調査協力者 2010 年 2 月より開始したニセコ町でのフィールドワークは現在も継続中であるが、これまでニセコ町の生え抜き住民 20 名(男 6, 女 14)から被験者としての協力を得ている。年齢層別の内訳は、青年層(18~33) 5 名(男 1, 女 4)、中年層(34~59) 9 名(男 3, 女 6)、老年層(60~) 6 名(男 2, 女 4)である。ニセコ町自体での言語調査は過去に一度も行われていない。

データ収集 各協力者とのインタビューにおいては、調査タスクとして(1)~(4)を設定した。面接調査時の音声は、すべてデジタルレコーダーとラバリエマイクを用いて録音した。

- (1) 話者属性に関する基本情報の収集: 話者の生育地・年齢・家族構成・親/祖父母・学歴・職業など。
- (2) 話者の社会生活に関する情報の収集: 趣味・特技・余暇の過ごし方・地域での社会活動・日常のコミュニケーション活動など。
- (3) 話者の日常語(vernacular)の収集: 幼少時代、子供の頃よくした遊び、今も思い出に残る学校の先生・友人や出来事など。
- (4) ニセコ地区の生活変化に対する個人的意見や感想の収集: 昔と今の街の変化、生活上の変化、外客誘致、外地人の流入、町が変化して良かった事・良くなかった事、これからの課題など。

インタビュー終了後、北海道方言的語彙と文法の使用に関するアンケート調査(高野 2012)への回答を依頼した。

分析手順 下記(1)~(3)に焦点を当て分析を

行った。

(1) アンケート調査による北海道方言的語彙・文法についての使用意識

アンケート調査では、先行研究を参考に語彙項目および文法項目をそれぞれA群・B群に分けた。A群は「古方言」や「中興方言」を含み(井上1983)、古くから認知されてきたが北海道方言全般の共通語化の進行とともに若い世代に向け廃れつつある項目、B群は1970~80年代に盛んに行われた北海道方言調査(小野1983, 国研1997など)により「新方言」と特定された項目から構成される。本ニセコ調査では、ちょうど中年層話者(34~59歳)が1970~80年当時の「新方言」の担い手であったと考えられる。

語彙A群(伝統的方言語彙)は39項目、語彙B群(新方言的語彙)は10項目、文法A群(伝統的方言文法)は20項目、文法B群(新方言的文法)は22項目、合計91項目を今回の分析対象とした。

(2) インタビュー内で話者が表明する意見や態度を基にした「土着イデオロギー」の類型化

各協力者とのインタビュー内容から、それぞれの協力者を土着イデオロギーの持ち方によって下記A~Cのタイプに分け、方言使用意識上のバリエーションとの規則的関係を検証した。

- A. ニセコ地区の社会変化へ否定的・反対意見を持つ話者(研究成果欄掲載の図では「年齢層・Neg・年齢・性別」として表示)
- B. ニセコ地区の社会変化へ肯定的・前向きな意見を持つ話者(「年齢層・Pos・年齢・性別」)
- C. 社会変化へは中立的立場、またはどちらの立場もはっきりとは示さなかった話者(同様に「年齢層・Neut・年齢・性別」)

(3) 自然談話のバリエーションに見られる土着イデオロギーの顕在化

調査協力者20名の中で、ニセコ地区の変化に対し否定的なスタンスを最も能弁に語った男性話者を例にとり、インタビュー談話に観察される音声的バリエーションを土着イデオロギーとの関連について試行的に検証した。

4. 研究成果

成果 1. 土着イデオロギーの世代差と個人差の背景 バリエーションの分析にあたっては、4種類の各項目群(語彙A・語彙B・文法A・文法B)において、回答者が方言的項目を選んだ場合は1点、共通語的項目を選んだ場合は0点を加算し、満点(100%)は91点(語彙A39点、語彙B10点、文法A20点、文法B22点)となる。この割合が高ければ高いほど、(少なくとも意識上は)ことば

に方言的色彩が濃いということになる。図1~3は、世代別に各協力者の方言的項目の使用(意識)を割合(%)で示す。

まず世代ごとに、土着イデオロギータイプの分散を見てみよう(図1~3横軸)。若い世代(図1)では、グローバル化に伴う地域社会の変化に否定的な住民は少なく(5名中1名y-Neg-20f)、肯定的2名(y-Pos-18f, 16m)・中立的2名(y-Neut-33f, 33f)となっている。

対照的に、老年世代(図3)は否定的または懐疑的な住民が多数派であり(6名中4名

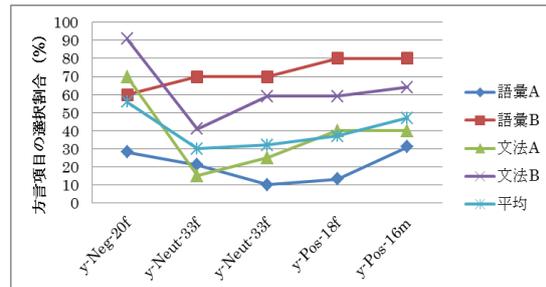


図1 若年層話者の方言使用意識と土着イデオロギータイプ

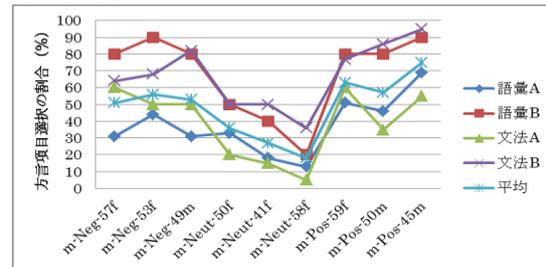


図2 中年層話者の方言使用意識と土着イデオロギータイプ

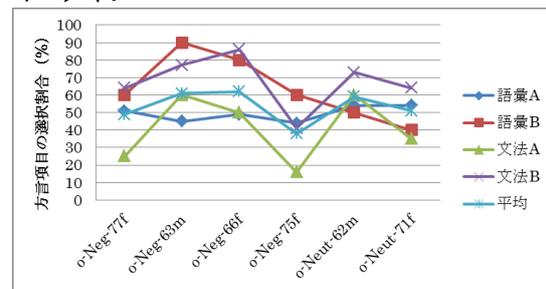


図3 老年層話者の方言使用意識と土着イデオロギータイプ

o-Neg-77f, 63m, 66f, 75f)、中年世代(図2)では否定的(3名 m-Neg-57f, 53f, 49m)、中立的(3名 m-Neut-50f, 41f, 58f)、肯定的住民(3名 m-Pos-59f, 50m, 45m)が均等に散らばっている。急速なグローバル化という生活変化を目の当たりにし、若者は柔軟でオープンな姿勢、働き盛りの中年は職業を中心とした社会生活上の個人差から意見や態度は人により様々、お年寄りには頑なで防御的な姿勢を示す傾向にあることは、社会全般でよく見られる社会心理や行動パターンの世代間

格差と一致すると言えよう。

しかし、そのような世代ごとの傾向を受け、各世代内でさらに一人一人の社会生活や日常のコミュニケーション形態を質的観点からつぶさに分析していくと、個々人が持つ特定イデオロギーの背景（理由）がある程度は説明がつくように思われる。特にグローバル化に対し、肯定的意見を述べる住民には共通して「地元との密度の濃い関わり合い」が挙げられる。また、中立的な立場をとる（または何も意見や感想を表明しなかった）住民にも、社会生活における一定の共通項が見られた。以下で、その詳細を世代ごとに見ていくことにする。

若年層の肯定的住民一名（y-Pos-18f）は幼い頃から英語が好きで、観光客への道案内のボランティア活動に参加するなど地域の外客誘致関連活動に積極的な若者であり、もう一名（y-Pos-16m）は長く生徒会役員を務め、クラブ活動で町外へ遠征する機会も多い活動的な若者である。どちらの話者も日常生活の中で、ニセコ住民以外の人々を含む外集团的な広範なコミュニケーション活動に触れる機会が多く、成人と比べそのレンジは狭いとはいえ、社会生活での視野は外向きと言える。

中年層の肯定的住民（図 2）は、上記の若年層二名と同様、日常生活の中で地域に密着した社会活動に積極的に参与している。商店経営者（m-Pos-50m）は地元の会議体で役職を持ち外客誘致関連活動に直接的に関わっている。専業主婦（m-Pos-59f）はニセコ町民を主体とした NPO 団体の理事として幅広く町の行政にも参画する機会を多く持つ。自営農業主（m-Pos-45m）も町内の他の農家と連携して農業祭を企画・運営したり、地元のスポーツ振興活動に積極的に参与している。

グローバル化に否定的な立場が主流である老年層（図 3）の中にあって、グローバル化は「時代の趨勢」「痛し痒し」「町のためには仕方ない」として他の老年層住民よりは比較的オープンで中立的な立場をとる住民が 2 名いた。住民 o-Neut-62m は、多くの自営農家をまとめる連合会の会長、住民 o-Neut-71f は長年、民生委員として町に貢献し、地元では良く知られた人である。どちらも地域社会と関わり合いの深い社会生活を送っていると言える。

一方それとは対照的に、グローバル化に対し明確な意見や感想を持たない住民は、おしなべて地域の変化に比較的無関心か、日常生活の中でそれをほとんど実感していない人々が多かった。若年層の中立的住民 2 名（y-Neut-33f, y-Neut33f）は両者とも子育てに多忙な専業主婦で、どちらも社会生活の中で直接的に地域の変化を実感することはほとんどないとし、インタビューを通して町の

変化に対する意見や感想を述べることはなかった。同様に、立場を明確には述べなかった中年層住民 3 名は、家業である商店経営に携わる女性（m-Neut-50f）、パートで働く主婦（m-Neut-41f）、専業主婦（m-Neut-58f）などであるが、どの話者もとりにてて地域の社会活動に積極的に関与している住民ではなかった。

最後に、グローバル化に対し否定的な立場をとる住民の意見は人により様々であった。外国人による土地（特に水源）の買い占めや自然破壊に危惧を抱く農業主や農協退職者、「本州からの転入者は本当の北海道（特に厳しい冬）を知らない」とニセコ人気の持続に懐疑的な人々、「知らない人が多くなり、こじんまりした町が住みづらくなった」と不満を述べる人々、グローバル化への町の対応が遅れていて、これ以上の規模の拡大は困難と考える人などがいた。

成果 2. 方言使用意識のバリエーションに見る二つのローカリズム 図 1~3 からは特定の土着イデオロギータイプと方言使用（意識）割合において、興味深い相関が見られる。過去の類似の研究（Labov 1963 など）からは、地域社会の変動に否定的な住民が、郷土への忠誠心や帰属意識から「ローカリズム」を主張すると言われる。そのような社会的意味の伝達手段として当該地域に特徴的な言語変項を誇示する傾向は、ニセコのグローバル化に否定的なスタンスをとる話者において（少なくとも方言使用意識上は）一貫して見られる。それは特に図 2 の中年層 3 名（m-Neg-57f, m-Neg-53f, m-Neg-49m）の示す高い方言使用（意識）の割合に明確に現れており、若年層 1 名（図 1, y-Neg-20f）、老年層 3 名（図 3, o-Neg-77f, o-Neg-63f, o-Neg-66f）においても類似の傾向が観察される（各図の平均点ラインを参照）。また、ローカリズムを主張する言語的方略は、例えば、古方言や新興方言を再生させるのではなく、比較的新しい方言項目（語彙 B、文法 B）がその役割を担っていると言える（図 1~3）。

一方、図 1~3 では、過去の研究ではあまり指摘されてこなかった新しい発見もある。ニセコのグローバル化に肯定的なスタンスをとる住民たちにおいても、否定的な住民と同様、地域方言への強い志向性が一貫して観察される。中年層 3 名（図 2, m-Pos-59f, m-Pos-50m, m-Pos-45m）と若年層 2 名（図 1, y-Pos-18f, y-Pos-16m）は、特に高頻度の方言使用（意識）を示す（各平均点ラインを参照）。このことから、地域社会のグローバル化を受容する住民が当該地域方言の衰退（共通語化）を押し進める主体になるわけでは必ずしもなく、むしろ日々変化する地域社会と積極的に向き合い、新しい変化と融合す

る社会生活を送ることで、グローバル化に否定的な住民とは異なる類の「ローカリズム」をかたち作り、地域方言の保持に貢献していると言える。上記のグローバル化に否定的な住民と同様、ここでも比較的新しい方言項目（語彙 B、文法 B）が活用されている。

最後に、方言使用意識から少なくとも推察できることとして、ことばの共通語化（つまり、地域方言の衰退）を推し進める母体は、おそらく地域の社会変化に比較的無頓着で拘りがなく、地元で先端的な社会活動に参加する機会をあまり持たないごく一般的な住民である可能性が高い。

**成果 3. 自然談話における土着イデオロギーの顕在化** 地域の急速なグローバル化に対する住民のローカリズムは、実際の言語運用の中でどのように顕在化するのだろうか。本分析では、20名の調査協力者の中でもとりわけ地域のグローバル化に対し否定的なイデオロギーを雄弁に語った話者 1 名 (m-Neg-49m) をケーススタディとして取り上げ、特に音声面のバリエーションにおける「話題」との相関変異に着目して分析する。

当該話者 (49 歳男性・自営農業) は、ニセコ町の農家の長男として生まれ育ち、20 代前半に冬の出稼ぎとして数ヶ月を本州で過ごした以外、外住歴はない。家業である農業を継いで四代目となる。ニセコのグローバル化に関しては、特に自然破壊や土地（特に水資源）の買い占めなどに対し強い反対意見を述べていた。

約 1 時間半に及ぶインタビュー音声を中心に、特に以下の変項(1)、(2)の揺れに内在する規則性をインタビュー内容（話題）との関係に着目して検証した (cf., Rickford & McNair-Knox 1994, Schilling-Estes 2004)。

- (1) 「語頭以外のカ行子音の有声化」(池上他 1977, 北海道方言研究会 1978, 国研 1997) : ネゴ (猫)・セナガ (背中)・ニセゴ (ニセコ)・言ったゴト (事) に・陰にカグレテ (隠れて) など。
- (2) 「語頭以外のタ行子音の有声化」(池上他 1977, 北海道方言研究会 1978, 国研 1997) : ハド (鳩)・コドシ (今年)・親がタテデ (建てて)・そんどキ (その時)、など。

	人物背景	幼少時代	グローバル化意識・態度	農業やりがい・想い	計
カ行有声化	37.5% (3/8)	50% (14/28)	64.4% (29/45)	53.8% (14/26)	56.1% (60/107)
タ行有声化	9.1% (1/11)	17.5% (7/40)	23.7% (9/38)	26.9% (7/26)	20.9% (24/115)

表 1 49 歳男性自営農主の音声バリエーションと話題の規則的關係

表 1 から全般的にタ行子音（平均 20.9%）よりもカ行子音の有声化（平均 56.1%）の割合が高いのが分かる。インタビュー内では、生い立ちや家族構成などについて尋ねた「人物背景」（データ収集欄参照）、幼い頃のニセコや学校での出来事・よくした遊びなどについて尋ねた「幼少時代」(childhood)、ニセコのグローバル化に対する個人的意見や感想を尋ねた「グローバル化」(attitude)、自分の仕事（農業）への想いややりがいを尋ねた「農業」(identity) などの話題について語ってもらったが、図 4, 5 から各変項の使用上のバリエーションにはそれらの話題特性との明らかな規則的相関が確認できる。

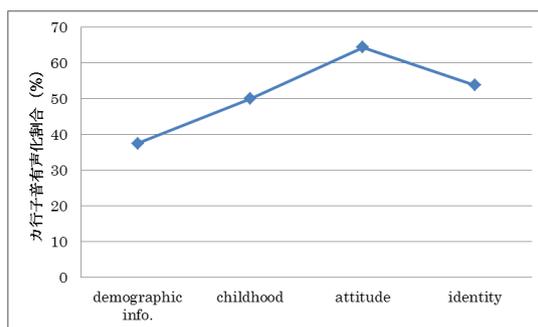


図 4 49 歳男性自営農主の談話音声における語頭以外のカ行子音有声化 x 話題

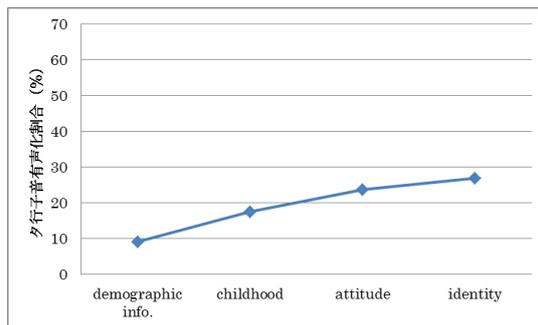


図 5 49 歳男性自営農主の談話音声における語頭以外のタ行子音有声化 x 話題

図 4 から、グローバル化に対する否定的なイデオロギーと関連する話題 (attitude) において、当該話者は方言的特徴である「カ行子音の有声化」(64.4%)を最も頻繁に用いていることが分かる。また、社会全般に若者や都会人などから敬遠されがちな農業という仕事への熱い想いややりがいを語る場面 (identity) においても、当該変項は高い頻度で用いられている。これらの傾向は、カ行子音に比べ全般的に使用頻度の低い「タ行子音の有声化」においても見られ、どちらの話題においても平均 (20%程度) を上回る頻度で用いられている (図 5)。当該話者の生い立ちや家族構成などを尋ねる比較的中立的な話題から、より「日常語」を使うとされるカジュアルな場面 (表 1 幼少時代、図 12

childhood)へ話に移るにつれ、どちらの変項の使用においても徐々に頻度が増す。そして、地域のグローバル化への個人的意見を表明したり、農家としての自己の社会的アイデンティティを主張する場面においては、さらに高い使用頻度を示し、当該話者の話ことばにはより方言的趣が誇示されることになる。

以上のように、インタビュー時における「話題」と密接に関わる規則的変異から、当該音声変項が話者の土着イデオロギーを指標する言語的リソースの一つとして活用されていることは明らかである。これは、先に概説した方言使用意識と土着イデオロギーの相関における相乗的な関係と同様、自然談話という実際の言語運用においても、(おそらく無意識的に)話者は音声という仔細なバリエーションを通して、土着イデオロギーを顕在化させていると言える。

### おわりに

急速なグローバル化が進む今日の日本社会において地域方言の共通語化は極めて自然な成り行きと言える。しかし、それとは逆行するかたちで地域の固有性や土着性を誇示・主張するイデオロギーの草の根的な芽生えやそれと密接に関わる地域方言の固持など「ローカリズム復興」の可能性については、これまでのバリエーション研究において本格的な調査は行われてこなかった。急速なグローバル化が進む地域社会(ニセコ)をフィールドにした今回の調査結果から、予備的分析の段階ではあるが、住民たちの言語意識や実際の言語運用における「ローカリズム」の顕れとそれと相乗的関係にある地域方言保持の可能性は経験的に立証できたのではないかと考える。

また、本調査では、従来のバリエーション研究における諸調査法を積極的に融合し適宜活用した。具体的には、「方言使用意識」(語彙・文法アンケート調査)や実際の談話データ(インタビュー)など言語運用に関わる異なる次元からのデータの収集、さらには、インタビューの中で垣間見られる住民の意識や態度の有り様に注目する「質的洞察」を分析に組み込むことで、ことばのバリエーションが持つ「社会的意味」の探究を試みた。

今後の研究の展開として言うまでもないが、より調査規模を拡大し、今回の検証で明らかになった話者の土着イデオロギー(肯定・否定・中立)と言語使用上のバリエーションの相関が、地域社会全体の中どのように埋め込まれ、当該方言全般の変化とどのように結びついているのかを見極めることが重要課題となる。また、分析方法論に関しても、音声のみならず語彙・文法・談話など言語の諸側面に目を向け、頻度の高・低に関わらず、土着イデオロギーを伝達する手段とな

るような変項の特定を注意深く継続すべきである。分析用データに関しても、アンケート調査による方言使用意識や調査者によるインタビュー談話のみならず、友人間や家族間会話など内集団的場面における言語運用の個人内変異(スタイル)を観察し、多元的視点から土着イデオロギーの発現を見極めるべきである。

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

高野照司(2011)「バリエーション研究の新たな展開」日本語学11月臨時増刊号『言語研究の新たな展開』256-275頁

[学会発表](計0件)

[図書](計1件)

高野照司(2012)「ことばのバリエーションの社会的意味を伝達する能力～地域社会の急速なグローバル化がもたらす土着イデオロギーに着目して～」『コミュニケーション能力の諸相:「共創能力」を考える』(片岡・池田編著、ひつじ書房)2012年秋出版予定

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:  
〔その他〕  
ホームページ等

### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

高野照司 研究者番号: 00285503

(2) 研究分担者 該当なし

(3) 連携研究者 該当なし